

# 小麦「さとのそら」の早期播種技術

農業総合センター農業研究所

## 【研究の概要】

コムギ縞萎縮病抵抗性をもつ小麦品種「さとのそら」は、倒れにくく多収であるため、従来の品種と切り替えたことで、本県の小麦単収は 60kg/10a 程度増加しました。一方で、麦作経営の大規模化を背景に麦類の播種時期は遅れる傾向ですが、「さとのそら」は晩播適性が低く晩播すると収量が下がります。このため、本県における麦類の播種適期である 11 月上旬より前に播種する早期播種技術を確立し、経営全体の収穫量増加を図りました。

## 【研究内容】

### 1. 所内試験

適期より半月程度早い播種は、生育が旺盛になりやすいため、播種量を減らし、農閑期の作業を想定した後施肥（播種から 2～3 ヶ月後の施肥）としました。

### 2. 現地実証

大規模に麦を生産している経営体で、1 枚の圃場で試験栽培を行い、その後、経営体全体での実証試験を行いました。

	早期播種	適期播種
播種期	10月中下旬	11月上旬
播種量	4～5 kg/10a	8 kg/10a
基肥の施肥法	後施肥 (播種から2～3か月後の農閑期)	標肥 (播種前または播種同時)

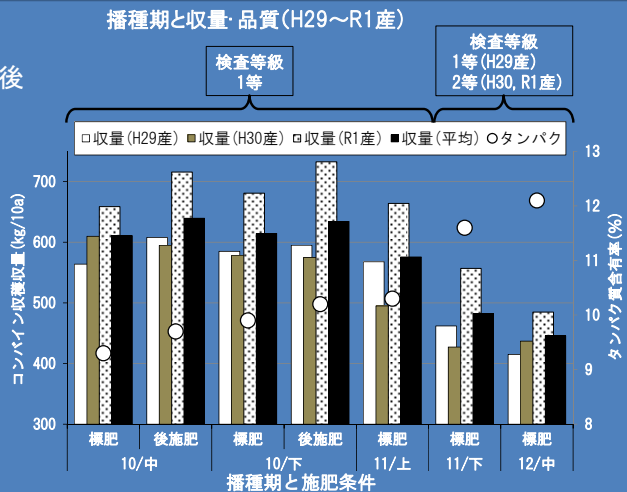


早期播種では、生育制御（抑制）が重要  
→過繁茂による生育中後期の凋落と、過度な生育の進展による春先の凍霜害を軽減

## 【研究成果】

10 月中下旬に播種し、2～3 ヶ月後に施肥を行う後施肥とすることで、適期播きと比較して同等以上の収量が得られ、検査等級も全て 1 等でした。また、後施肥をすることで子実の粗タンパク含量も向上しました。大規模実証においても、同様の成果が得られました。早期播種は、播種程度\*が「Ⅳ」と高い小麦品種「さとのそら」で導入できます。

\*麦類で栄養生長期から生殖成長期へ転換する際に一定条件の低温を必要とする性質のこと。品種によって異なり、低温を全く必要としない春コムギ(Ⅰ)から最も低温を要求する冬コムギ(Ⅶ)まで 7 段階に分類されている。



本研究は、「革新的技術開発・緊急展開事業（うち経営体強化プロジェクト）」において試験研究計画名「タマネギ等高収益作物の多収・安定化技術と情報技術の活用による高収益水田営農の確立」の助成を受けて実施した。

## 【将来の展望】

小麦の播種作業を早期に開始することで、麦類の播種作業を早めに完了できるようになります。経営内で最も遅い播種時期を、早期播種に置き換えることで、経営全体の収穫量増加が期待できます。